

## 「出会い」の視点から翻訳を考える

一

翻訳とは出会いの問題であると私は考えている。そこで、その方法論から考えていきたい。

一般に、A と B との出会いを、科学的、客観的に考えるとすると、どうするか。まず A について考え、また B について考え、次にその A と B との出会いを考えるだろう。しかしこれは「出会い」の視点からの考え方ではない。

「出会い」の視点では、最初に A または B の主体的立場から出発する。次に、その A または B が相手の B または A に「出会う」ことを考える。つまり、これから「出会う」B または A のことは、よく分かっていない、という前提がある。いわゆる学問的、科学的方法というのは、「出会った」後に振り返って全体を見返す視点に立っているのだ。全体を見渡す視点ならば、何となく客観的で科学的に感じられるのだろう。だが、これでは「出会い」の問題はよく理解できない。

具体的に考えて、たとえば、若い人たちがいわゆる出会い系で相手を探し始めるとしよう。あるいは就活、婚活などでも、出会う相手については、ある程度分かっている、よくは分からない、というところから始めなければならぬはずだ。

翻訳の問題も、基本的には同じはずである。いわば「出会い系」の翻訳論を考えよう、というのである。

二

翻訳者は、まず翻訳すべき対象の言語について、その意味内容について、よく分かっていない、というところから出発する。もちろん、翻訳者は、その対象の言語についてよく通じ、またその意味内容について深く感動して翻訳し始めることがあるだろう。しかしそれを「翻訳」する、ということは、もとの言語とは違った言語に置き換え、しかももとの内容を伝えるという仕事に立ち入らなければならない。そして、およそ相異なる二つの言語では、その個々の言葉の意味も、それらをつなぐ文法も、必ず違っている。

翻訳とは、この違いをのり越えて、原文と同じ意味をつくり出す仕事と、普通は考えられるだろう。翻訳論の歴史の中で、このことはいつもくりかえし追求されてきた。熱心に求められてきたということ、他面で、それがいかに困難であるか、というこ

とも物語っている。歴史上さまざまな翻訳論があるが、これらを、ここでおおざっぱに翻訳可能論、翻訳困難論と二分するならば、私の立場は、この困難論に属するだろう。

そこで、私の困難論であるが、基本的に「出会い」から考えていく。

「出会い」を主体的にとらえると、「出会い」の相手はよく分からないと述べた。このよく分からない相手と、やがて「出会い」を経て結ばれる段階に至るだろう。この「出会い」の前と、「出会い」の後とをもう一度考え直してみよう。「出会い」の後になれば、分からないと思っていた相手は、分かってくるはずだ。「分かってくる」と言ったのは、分かるとは違う。正確には、「分かった」と思い込むのだ。およそ恋の「出会い」でも、就活の「出会い」でも、目指す相手を短時日に完全に分かるのは容易ではない。

この「分かったと思ひ込む」段階から考えよう。恋が成ったと思ひ込む恋人、この仕事のことは分かったと思ひ込む若者、そして、翻訳ができたと思ひ込む翻訳家は、この思ひ込みは間違いないと思うようになる。すなわち、この「思ひ込み」段階の前の「分からない」は、その心裏からはすでに消えている。そして、他方、やがて至るかも知れない完全に分かる段階のことも、よけいな心配になるだろう。

すなわち、翻訳ができたという思ひ込みの段階では、その翻訳と原文とのズレについては、あまり気が付かない、なかったことにされる。多くの場合ほとんど無意識化される、と私は言いたいのである。

これまで私は、近代以後に西欧語からの翻訳で造られた日本の翻訳語が、元の西欧語の意味とズレているという例をたくさん指摘してきた。たとえば、「自由」、「権利」、「愛」、「彼、彼女」などなど、詳しくは私の著書などをご覧になっていただかないが、ここでは少し視点を変えて、翻訳語のズレの構造について考えてみたい。まず、多くの場合、このようなズレは無意識化されている、という現象を生み出すような、その基本構造である。

わかりやすいような具体的な例を挙げよう。

たとえば、若い人たちやテレビなどでよく使われる「アイドル」という言葉がある。テレビや映画などで活躍している可愛いタレントなどを指して言っているのだが、これは元来英語の idol の翻訳語である。外来語とも言うが、広く翻訳語の一種である。

idol という英語には、「可愛い」という意味はない。だから、「アイドル」のよく使われる意味は、翻訳日本語で造られた意味である。おそらく、「アイ」から「愛」になり、「ドル」は英語の doll の「人形」の意味が重なったのであろう。新造語はとくに近代以後、次々につくられて、また流行してきたので、これはまあこれでいいとして、問題は、今日たいていの日本人は、中学校の英語で idol の意味を習って知っているはずなのである。またおそらく、「アイドル」は idol から来ているということも、たとえ知らなくても指摘されればすぐ納得できるに違いない。それにもかかわらず、「アイドル」と idol との意味のズレは、公然と無視されている。私はかつてある雑誌で、「アイドル」をテーマにした文化人たちの座談会を読んだことがある。この話し合いの中でも、「アイドル」は盛んに口にされながら、まともな知識人たちののだが、誰からも idol とのズレは指摘されなかった。すなわち、翻訳語の元の意味が気付かれない、無意識化されているのである。

### 三

一般に、翻訳語の意味はその原語と比べると、ほとんど必ずズレている、と私は考えている。それは、日本語に限らない

しかし日本は近代以後、世界でも稀なほど、西欧語の翻訳に熱心だった。それは近代以後に限らない。大きく言えば、建国以来の日本の文化とも言えるのではないか。

島国の日本は、異文化に接する機会が乏しかった。そしてそれだけに、異文化に対して敏感に反応した。たとえば、幕末に薩摩藩は攘夷に熱心で、藩主の行列を横切ったイギリス人を斬って殺し、その結果、薩英戦争となり、鹿児島は火の海となった。

ところが、その後である。薩摩はイギリスに降伏し、藩の若者をイギリスに留学させ、その後、反攘夷の先頭に立って開国に貢献した。同じようなことは幕末の長州藩でも起こった。そして、1945年、日本はアメリカに降伏した。その後、短期間のうちに、日本の指導者も民衆も、いかにかつての敵国アメリカに従順であったかについては、R. ベネディクトが感嘆して書いている。

ここで、異文化に敏感に反応し、受容したということは、直ちに理解した、ということではないのである。いわば、「米英撃滅」を唱えていた人々が、ある日以後「アメリカが教えてくれた民主主義」に切り替えたのである。

異言語の交流の基礎には異文化交流の背景がある。異言語の翻訳語を造って受容したということも、そ

の構造は共通ではないか。

### 四

以上、私の考える「出会い系」の翻訳論の梗概をザット説明してきたが、およそこのような翻訳の文化を持ってきたということは、私たちにとってマイナスなのだろうか。実は、私自身これまで、日本の翻訳のマイナス面を多く指摘してきたように思う。

しかし、近頃少し反省して、そのプラス面についても考えたいと思っている。

すなわち、およそ翻訳が、その原文と意味のズレた結果を生み出していくということは、必ずしも悪いことではない、というよりも、いい悪いを超えた、文化の発展の必然なのではないか、という思いである。およそ人類の文化が、国境を越えて展開するとき、いつも同じ形で広まってきたわけではなかった。文化の発展とは、その変化を常に含んでいる。翻訳は、そのような変化の、第一の契機である。

そんなことを考えて、西欧で盛んな翻訳論をみわたしてみると、ベンヤミン W. Benjamin の翻訳論があった。ベンヤミンは、およそ翻訳はその原文とはズレている、と考えている。ギリシャ語の原文をドイツ語に訳し、それをさらに英語に訳し、さらに日本語に翻訳すると、それぞれが翻訳のたびにズレていく。

ここまでは私の考えと共通だが、ベンヤミンには、さらにその先がある。翻訳者は、原文の言語と自らの言語との狭間で苦闘しつつ、やがてそのいずれとも違う言語が語るのを聞くようになる、というのである。この第三の言語を「純粹言語」と言っている。何やら神秘的な世界の話のようである。

私の言う「出会い」の翻訳論は、およそズレはズレたままで、どこまでもそのまま、相対主義の翻訳論であるが、「純粹言語」の出現は、ある絶対主義の世界である。

おそらくユダヤ・キリスト教の文化の人々にとっては、ズレはズレたまま、というような相対主義は我慢ならぬことなのであろう。旧約聖書のパベルの物語を想起する。世界には、始めに神の唯一の言葉があった。人間たちは罪を犯し、その結果、神は人々の言語をバラバラにした、と言う。翻訳とは、罪を犯した人間たちの悲しい営み、ということになるのだろう。

神を知らない私たち日本人は、ズレはズレたままの相対主義に安住している。「行く川の水の流れは絶えずして、しかも本の水にあらざり」の文化伝統であらう。